

昔々、男と女がいて、サリムという子供を得た。彼は、沢山の種類の作物が出来る畑を持っていた。ウサギという名の男がいて、彼はしばしばサリムの畑に行ってむさぼった。

サリムが畑に行く度に、食べ物が減っていた。彼は、作物を奪っている者を見つけようとしたが無駄だった。彼が占い師に相談に行くと、占い師は彼に言った。

「お前の畑を荒らす者は朝から昼までの間にやってくる」。

占い師は彼に水薬を調合したが、それは畑に撒いて、犯人を捕まえるためだった。ところが、或る者が、サリムが畑に水薬を撒いているのを知り、6時から正午の間は、罠にかかるので畑に行かないようウサギに知らせに行った。しかしウサギは畑に行き、食べ荒し、警戒を忘れた。サリムは彼をその場で捕まえ、首を刎ねた。ウサギに警告した者は、ウサギの死を認めるしかなかった。

或る日サリムは隣町に行った。彼は屯している若者たちを見つけたが、二人のうちのひとりが喧嘩をふっかけてきた。彼らが争っていると町民がサリムを取り囲んだ。彼らはサリムを捕まえて部屋に閉じ込めた。町長がやって来てサリムに質問した。

「何をしにここへ来たんだね」。

「ここに用事があるんです」。

町長は彼に、二度と会う気はないと警告した。

サリムの畑は依然、作物がよく実った。同じ若者の一団がサリムの畑に行って食べ荒らした。サリムは作物が減っていることをまた確認した。彼は占い師にもう一度会い、占い師は、泥棒は6時から正午までの間に来たと言った。彼は最初の時と同じようにして、その泥棒たちを捕まえた。彼は泥棒たちを町まで連れて行き、町長に告発した。町長はすべての町民の名においてサリムに謝罪した。